



認知症当事者をつくる、誰もが生きやすい社会

オレンジイノベーション・プロジェクトとは



「オレンジイノベーション・プロジェクト」は、認知症になってからも自分らしく暮らし続けられる共生社会の実現を目指し、認知症の人が主体的に企業や社会等と関わり、認知症の人の真のニーズをとらえた製品・サービスの開発を行う「当事者参画型開発」の普及と、その持続的な仕組みの実現に向けた取組を推進するプロジェクトです。

オレンジイノベーション・プロジェクトの詳細はこちら！▶



URL: https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/healthcare/dementia/OIP/oip.html

当事者参画型開発とは？

認知症及び MCI (軽度認知障害) の人の数は、2040 年には合計約 1,200 万人 (認知症約 584 万人、MCI 約 613 万人) に達し、65 歳以上の高齢者の約 3.3 人に 1 人を占めると推計されています。

住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる社会の実現に向けては、認知症になってからも使いやすい製品・サービスを充実させていく必要があります。オレンジイノベーション・プロジェクトで推進する「当事者参画型開発」とは、認知症の人が企業の開発プロセスに「参画」し、誰もが使いやすい製品・サービスの社会実装に向け、企業とともに新しい価値を生み出す「共創」を行う開発手法です。

当事者参画型開発の取組み



共生社会の実現に向けて

認知症になると「何もわからなくなる」「理解できない言動が増える」「一人では何もできなくなる」。そんなイメージをもっていないですか？

認知症の症状は多様で、一人一人異なります。実際には、認知症になり、日常生活で困ることが出てきても、工夫しながら、自分らしい暮らしを続けている認知症の人は多くいます。政府の「認知症施策推進基本計画」では、「新しい認知症観」が示されています。

新しい認知症観とは

「認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人一人が個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間等とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができる」という考え方です。

認知症の人を、一人の尊厳のある個人、
そして消費者として捉えていくことが大切です。